



特定非営利活動法人
産学連携学会

ニュースレター

00

パイロット版

大会シンポジウム風景（5月26日／会場：ウェルシティ徳島）

第3回産学連携学会（徳島大会）ご報告

産学連携学会第3回徳島大会
実行委員長 佐竹 弘

時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、この度は、産学連携学会第3回徳島大会開催（開催大学：徳島大学）にあたり、多くの会員の皆様方のご理解とご支援をいただきまして、成功裡に終了することができました。深く感謝申し上げます。

本大会は平成17年5月26日・27日、ウェルシティ徳島で開催されました。大会への参加者は、211名（事前登録191名、当日登録参加者30名、会員参加者80名）と、当初計画の2倍の方に参加していただきました。関係者を含めると250名以上の方々のご協力をいただき、開催することができました。

また、発表総数は91件（口頭発表65件、ポスター発表26件）であり、全国の産官学担当者の取り組みや考え方を発表していただきました。シンポジウム（1件）では、地域における産学官連携を考え、パネル討論会（1件）では、知的創造サイクルの研究成果の発掘、権利化、育成、活用の各分野における発表やその内容、産学連携における教育の重要性についてパネリストに総括していただきました。

本大会では、一般発表を初めてミニシンポジウム形式で行いましたが、発表後の会場からの質問が非常に多く、活発な討論が行うことができ、関係機関の方々の産学連携活動への関心の高さを伺うことができました。

交流会は、地域科学技術振興会議と共同で、約300名（学会から150名参加）が参加して盛大に開催されました。阿波踊りを交えた交流会では、打ち解けた雰囲気の中、全国の産学連携関係者が有意義な交流をしていただけたものと思っております。

来年度は、群馬大学で開催されます。会員皆様方が多数参加していただき、産学連携学会がますます発展できますようご協力のほどよろしくお願いいたします。

さたけ・ひろむ／徳島大学 産学連携研究企画部 部長
知的財産本部 副本部長

座長報告

二日間に行われた口頭発表。セッションについて、当日それぞれの座長を務めた各氏から短報を寄稿してもらった。(↑編註 それぞれは先にメールニュースにてご紹介した原稿の再録となります。)

1. 「インターンシップ」

飯島 徹

インターンシップのセッションの参加者は登壇者含めて22人でした。このセッションはインターンシップのそれぞれ3つのカテゴリーでの講演がありました。

①学部の教養課程での社会貢献を目指した実社会でのビジネスモデル発表、アイデアコンテストも含めた社会との接点を学ぶインターンシップ活動と大学人がその仲の取り持ちをすることで取り組みのNP0法人活動 ②従来の工場実習と呼ばれる大学院、学部高学年の対象向きの実企業体験の話のカリキュラムと学生意識調査と今後の社会の実学導入へ向けた取り組み ③大学院教育対象のアントレプレナー教育実施における学生の人生プランニングへの意識の教育課題 という話題提供総合討論では、以上をふまえた統括を行い、会場からは、いずれも社会人としての関わる方向性を多角的に大学入学時あるいはそれ以前も含んだ教育課程からの人生プラン設計を学ぶもの自ら構築し、早くから考え修正する機会を持ちながら学ぶことで社会に巣立つことで積極的な産業への関わる社会人教育を通じたインターンシップを設計することの重要性を持つ社会貢献について議論が及び活発に討論された。その中で、学生募集時等やそれ以前の対象も含めた若年層もレンジに入れたインターンシップの先駆者の重要性が次世代の担い手にモチベーションを与えた人間形成教育も議論され、大学だけでなく社会も参加型の若者の人生キャリアプランをしっかりと作れる教育貢献環境形成への課題について今後は議論しようと言うことで、次回のこのセッションへの投稿、討論をしようと呼びかけ合って終了し、次回のこの種のセッションの発展を期待したい。

(いいじま・とおる/室蘭工業大学 地域共同研究センター 助教授 (大会当時))

2. 「産学連携論考1」

北村寿宏

「産学連携論考1」のセッションでは、3件の報告がありました。1つは、産学連携を組織論から考察し、産学連携の様々なパターンとその適正な組織について考察された。共通して言えることは、お互いの信頼関係を構築することであり、信頼関係の構築が産学連携を成功させる一つのキーであることが強調された。もう一つは、産学連携の入口の方法論の一つとして、多数の教員により企業から提起された問題に対してその解決をフリーディスカッションして見いだしていくと言うものである。新しいアイデアの創出や共同研究への展開に結びつきやすいが、発明の取り扱いなどの課題についても指摘された。最後の発表は、産学連携を「学」としてとらえ、その構造を明らかにしようと言う試みに関する報告である。産学連携を体系化し「学」としていくために、今後の研究に期待したい。

(きたむら・としひろ/島根大学 産学連携センター 助教授 (大会当時))

3. 「産学連携論考2」

和田 元

島根大北村氏、室工大飯島氏、山形大足立氏により発表がなされた。前日荒磯氏の産学連携構造論の提案を意識してか、北村氏は発表冒頭に“これは産学連携学裏バージョンである”と発言されたが、“産学連携学”を生み出す材料になり得る表側の議論が多く含まれたセッションであった。北村、飯島両氏は、そもそも本来の大学のあり方とは何かと掘り下げる研究内容の発表であった。特に飯島氏はJOICB等の文献検索システムと特許検索システムIPDLを統合すべきと言う具体的提案にまで言及し、「知の生産・継承」の取り扱い問題の重要性を指摘した。この後足立氏は、知的財産の「原則機関帰属」の問題を克服するために大学独自で構築した山形大学の知的財産管理体制を紹介し、会場から盛んな質問を受けていた。(わだ・もとひ/同志社大学 教授)

4. 「NEDOフェロー」

内島典子

本大会で2時間という大きなセッションとなった「NEDOフェローセッション」が大会第1日目の午後より行われました。

NEDOフェローシップ事業担当者から、事業趣旨や制度の説明、成果報告がありました。また、現役フェロー2名、フェロー卒業生1名から、研修内容やこの事業に対する将来の期待について発表がありました。さらに、指導教員の視点より、人材育成の問題点や育成プログラムについて発表がありました。

受け入れ機関の体制により、さまざまな形の人材が養成されています。社会的に産学連携に携わる人材不足があり、そして、その人材を育成・輩出していくことが大きな課題となっていますが、討論ではフェローを育成する受け入れ機関の体制、育成手段の構築、フェローの将来展望について議論が繰り広げられました。

今回、発表者以外にも現役フェロー、フェローOBが多く集まりました。フェローは限られた期間の中ですが、産学連携の幅広さ、求められている人材の深さの中で、自分自身の目標軸をしっかり捉え、研修を行っていく必要があると感じました。大会を通し、各地域での様々な取り組みや、コーディネータとしての活動状況を見聞きし、徳島の地にて新たな刺激を受け、1500km北上した北見に戻ってきました。

(うちじま・ふみこ/北見工業大学地域共同研究センター NEDOフェロー)

5. 「地域連携4」

河崎昌之

離島の空間的な特性と、地域の大学が有する知見とをうまく掛け合わせ、新しい健康ビジネスを創出させた三重の取り組み。様々な技術領域の浮沈を乗り越えて、新しい北海道的なものを模索、ユニークな共同受注システムを結実させた北からの報告。地域に集積された技術のさらなる高度化を着実に進める、南は北九州・ロボット産業の事例。そして、時空を越え技術やアイデアが行き交う、ウェブに立ち上がった信州の架空のまちなくモノシティー。

地域連携の第一歩は「地域に関心を抱くこと」であると思う。ここでの4講演はいずれも、その「出発点」から地域へ冷静な眼差しを送ることにより興ったプロジェクトについての報告であったと思う。(かわさき・まさゆき/和歌山大学地域共同研究センター 専任教員)

6. 「地域連携5」

山口佳和

今回は、地域連携5のセッションの座長を務めさせていただきました。4件の発表があり、まず岡山県産業振興財団の山田先生から、都市エリア事業での取り組み事例をご紹介いただくとともに、コーディネータの心得についてご提案をいただきました。島根県商工労働部の福間先生から、産学官連携を中心にして新産業創出プロジェクトを推進していることをご説明いただきました。和歌山県商工労働部の児玉先生から、支援組織と仕組みを改革してわかやま産業イノベーション構想を推進していることをご説明いただきました。和歌山大学の湯崎先生から、社会とのコミュニケーションの新しい手法としてアーバンサテライトを設置し運営しており、「書を携えて町に出よう」が基本であることをご説明いただきました。これらの発表から、各地域で工夫を凝らした独自の取り組みが行われていることが分かります。いずれの発表も貴重な情報を含んでおり、産学連携学会の蓄積になると評価しています。

座長の他にも、パネル討論会のパネリストを務めさせていただきました。私にとって身に余る光栄だったのは、論文賞をいただいたことです。賞に恥じないよう、産学連携の研究を進めて評価される論文を創出していきたく心に誓いました。最後に、徳島大学の佐竹先生を始めとする地元徳島の皆様方には、行き届いた準備と暖かいおもてなしをいただきました。有意義で快適な徳島出張とすることができ、深く感謝申し上げます。

(やまぐち・よしかず/独立行政法人 産業技術総合研究所 研究環境整備部門 部門長)

7. 「知的財産2」

足立和成

本セッションは4つの講演からなっていた。最初の意匠の問題を除く3つの講演は、いずれも極めてポレミック(論争的)な題目のもので、セッション時間中には結論の出そうにないものばかりだった。

特に、青色発光ダイオードを巡る訴訟に関する講演は、その当事者の片側の発表だったため、特に進行に神経を使った。そのため、意匠という取り扱いの難しい知的財産の評価や、さらに論争的な不実施補償機関における特許戦略の問題については、質問すら受け付けるゆとりがなかったのが残念だった。「青色～」と並んで、研究者の立場から見た共同研究契約に関する講演にも、極めて難しい問題が含まれていたが、議論を深めることは出来なかった。

学会を盛り上げようという意図は分かるのだが、参加者が欲求不満に陥らないよう、あまりに論争的な題目の講演は、一つのセッションに集中させないようにする配慮が欲しい。

(あだち・かずなり/山形大学 工学部 助教授(工学部長付))

8. 「ベンチャー」

上田 昇

○発表テーマ「北海道地域経済の現状と大学発ベンチャーの役割」

「新しい農産業」として従来型の有機肥料の使用に加え、環境に配慮して農薬の使用を抑制するための方策として生物間相互作用という手法を積極的に導入していることが注目される。この手法がより発展していくことが期待される。また、単に一次産業のみではなく、二次産業(農産物加工)、三次産業(流通)と、工業製品でのサプライチェーンマネジメントと類似のアプローチをいち早く導入している。

○発表テーマ「OBベースの産学連携支援組織の活動状況」

支援組織参加者のインセンティブを将来的な顧客確保においている点や連携案件を積極的に創出するための仕組みとして具体的なテーマを検討する分科会を設置している点、など従来に比べ、進化していることがうかがわれる。また、ベンチャー企業で時に致命的な課題となる起業時の人材確保に対応する人材プール組織としての機能をも有していることも今後の発展が期待される。

○発表テーマ「大学発ベンチャー創出とビジネス環境因子の相関に関する分析」

ビジネス環境因子の洗練と長期間にわたる分析が今後も持続することで因子の重要度の特徴が明確になっていき、さらにこれまでは知られていなかった新しい因子が見いだされることが期待される。

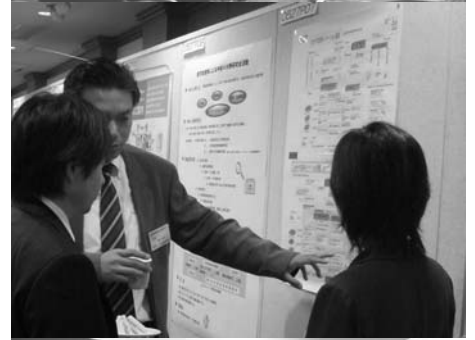
(うえだ・のぼる/エイムテック 徳島大学客員教授)

9. 「共同研究分析」

川崎一正

「共同研究分析」のセッションでは、4件の発表が行われました。最初に大分大の伊藤先生より、共同研究をメインストリーム型とニーズプル型に分類し、各分野ごとに分析した結果についての報告がなされ、次いで、東北大の長平先生から新製品開発プロセスの前段階における産学連携における有効性をアンケート調査結果とその χ^2 乗分析により評価した結果が報告された。また、北陸先端大の立瀬先生より同大のCOEにおける異分野連携の戦略的取り組みが、横国大の坂元先生より企業-大学間の距離を直線距離とルート距離で比較した結果の報告がなされた。このセッションでは、他よりもデータを分析する内容が多く含まれており、比較的学術的な印象を受けました。また4件それぞれ切れ口が異なっており、今後様々な展開が期待されると思います。徳島大会を通して、各地域での産学連携の取り組みを見聞するとともに、徳島の文化にも触れることができ、参加してよかったと実感しています。

(かわさき・かずまさ/新潟大学地域共同研究センター 助教授)



letter from



和歌山

那智の滝をのぞむ (那智勝浦)

和歌山での学会員の集りはいつも出席率100%。それもそのはずで、地域内の会員数は筆者を含めて現在4名ですから。

しかしながら会員間のコミュニケーションは非常に密であると思います。互いの研究会に行き来をし、審議会等でも月に一度は顔を合わせます。

第3回大会会場は<徳島>。海を隔ててはありますが、いわば「お向かいさん」でしたので、昨年末の忘年会で「みんなで徳島へ行こう!」ということになりました。

そんな「チーム和歌山」は正会員、非会員混成で、口頭発表4本、5枚のポスター

発表を行いました。発表の中でもご紹介をしました産官学民の交流空間で行われたイベント等でも徳島大会をご案内をすることで、計8名が海を渡って参加しました。

地域交流の先進地には遠く及ばない、大変小さな輪ですが、今回そのポテンシャルが顕在化したことに、正直感激しました。

小さくとも先に続いていくような、そんな輪になればと思ってます。

河崎昌之 (かわさき・まさゆき/正会員:和歌山県)

book mark

産学連携学事始め (1-10)

荒磯恒久 著

これは日刊工業新聞紙面に、今年平成17年6月から8月に掛けて、計10回シリーズの特集連載として掲載をされたものです。筆者は産学連携学会の新会長を務める北海道大学大学院・教授の荒磯恒久氏。

一般書籍ではありませんので「book mark」という当コーナーでとりあげるには?とも思われましたが、恐らく産学官連携が<学問>という視点から書かれた初の文章であり。現在学会にて編集が進められている「(仮称)産学連携学入門」の基調となるものとして、ここで会員の方に敢えてご紹介させていただ

くこととしました。

新聞連載ということもあり、各回程度な文章量で、連携の現場に身を置きながらの、事例ベースの論考により、要点がまとめられています。

残念ながら冒頭のように、すでに連載は終了していますが、未読でご興味がおありの方は、北海道大学創成科学共同研究機構・リエゾン部ホームページ(<http://www.cast.hokudai.ac.jp/>)に転載されていますので、そちらにアクセスの上ご覧いただければと思います。(編集子)

post script

やっと産学連携学会のニュースレターのパイロット版が完成しました。これもひとえに、デザインセンスのない足立和成(一応、会誌担当です。)に代わって、面倒なレイアウトを仕上げた河崎昌之先生のおかげです。

このパイロット版は、ニュースレターの本格的な発行に向けて会員の皆様のご意見を伺うためのものですから、ご覧になった上で何かご意見がありましたら、どんなことでも結構ですので、是非とも山形大学の足立(kadachi@yz.yamagata-u.ac.jp)までお寄せ下さい。

今回の内容は、メールマガジン(大分大学の伊藤正実先生のご努力下、頻りに送付されていることはご存知の通りです。)の最近の記事から、長期保存が望ましいものを抜き出し、それに会員交流のためのコーナーを付け加えた格好にしました。従って、殆ど編集らしい編集作業もしていません。にもかかわらず、恥ずかしげもなく編集後記なんぞを書いている足立に、あきれ果てておられる会員の方もきっとおられるでしょう。ただ、見苦しい言い訳

を少しさせて頂ければ、誰が会誌担当になっても無理なく発行し続けられ、かつ有意義な情報伝達のメディアであるニュースレターとは何か、を考え抜いた末の形態ではあるのです。

これで、産学連携学会の情報伝達のメディアは、速報性を重視するメールマガジンと学術的情報を後世に残すための学会誌に加えて、会員の備忘録や相互交流の場としての役割を果たすニュースレターの三本立てとなります。少しでも良いニュースレターにするために、どうか皆さんのお知恵をお貸し下さい。

足立和成 (あだち・かずなり/正会員:山形県)

next issue

◆特集 秋季シンポジウム

- ・ご報告 産学連携学会会長 荒磯恒久氏
- ・シンポジウム・レビュー

◆レギュラー 「交流広場」

- ・letter from 群馬一第4回群馬大会に向けて (前)
- ・book mark